

悼みとレジリエンス

心理臨床センター副センター長 興 津 真理子

集い、笑い、ふれあう、そのような屈託のない交流を私たちが失ってずいぶん経ちました。最近映画で人々がマスクなしで集まっている状況に違和感を覚え、私の中の「普通」の感覚がすでに変わってきていることに気づきました。私たちは失ったものを完全に同じ形で取り戻せなくとも、自分が置かれた状況を身になじませながら常に新たな生を作り出して適応していきます。しぶといともいえるし、これをレジリエンスと呼んでもよいのかもしれませんが。コロナ禍により、心理臨床センターも昨年度は一旦閉室しましたが、オンライン相談を利用して相談を再開し、一方で対面相談を継続するための工夫も重ねてきました。これによってセンターは新たな在り方を持つことができ、様々な事情でこれまでは来談が難しかった方ともセッションを行うことができるようになりました。困難に出会うことで私たちは新たな可能性を拓くことができるものと、一筋の希望を手繰りながら臨床実践を行っているところです。

このような状況において、闘病されていた臨床心理学系教員の佐藤豪（すぐる）先生が2021年7月18日に天に召されました。佐藤先生は心理学部の設立に合わせて誕生した心理学研究科（大学院）臨床心理学コースおよび心理臨床センターの立ち上げに多大なる貢献をされました。心理臨床科学の第1巻1号（2011年12月発行）にも初代心理臨床センター副センター長として、巻頭言「同志社心理学の新たな展開」を寄稿されています。その中で心理臨床センターの使命について述べられ、「校祖新島の「人ひとりは大切なり」という理念を心理学の領域で実現するための施設にしたい」と抱負を述べられています。佐藤先生ご自身もこの理念を大切にされていたのだらうと思います。弱さに寄り添い、温かく見守る眼差しは、臨床においてはクライアントに、教育においては学生に、また、同僚である我々にもいつも向けられており、病床にあっても常にセンターの働きに心を寄せてくださっていました。最後にお会いしたのは心理臨床センターの運営委員会でしたがその時もセンターの在り方について我々に語り掛けられたことを思い出します。

佐藤先生が願われた「人ひとりは大切なり」の理念に支えられたセンターの在り方は、今もなお、我々も志を一にするところです。10年前には想像もしなかった世界にあり、さらに佐藤先生を喪った痛みはなかなか癒えるものではありません。しかしこれらに折れるのではなく、柔らかく受け止めて、センターを利用される方やここで学ぶ学生に良きものを届け続けることができる、レジリエンスを持ち合わせた場を維持できるように努めていきたいと思います。その働きの1つとして、今年もまた論文集をお届けいたします。これを手にしてくださる方々には、是非今後とも我々の働きを見守り、ご指導いただければと存じます。

